

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00469

研究課題名(和文) ムージルの 遙かな愛 の精神史的系譜

研究課題名(英文) The intellectual-historical genealogy of Musil's 'Distant Love'

研究代表者

大川 勇 (Okawa, Isamu)

京都大学・人間・環境学研究科・名誉教授

研究者番号：10194086

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：従来近親相姦の有無を軸に論じられてきたムージルの『特性のない男』研究にトルバドゥールに由来する 遙かな愛 の視点を導入し、『特性のない男』における兄妹愛の精神性を明らかにするのが当初の目標であったが、研究の過程で兄妹愛は純然たる「精神的な愛」ではなく、性愛をも排除しない高次の精神性を有していることが判明した。それによって兄妹愛は、第一巻におけるウルリッヒの「正しい生」の探求に接続する「正しい愛」の探求であることが明らかになり、そこから小説中、愛の問題がたえず神秘主義と関連づけられ、モラルの問題として考察される理由についても解明の糸口が与えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

純然たる精神的愛でも、純然たる肉体的愛でもない、「精神的かつ肉体的な」愛のかたちを兄妹愛に見いだすことによって、従来兄妹の近親相姦の有無を軸に論じられてきた『特性のない男』の読み方に大きな変更をもたらすことができる。この成果を可能にしたのは、愛のテーマに即した『特性のない男』の翻訳であり、この翻訳が出版されれば(本年度中の刊行予定)、これまで20世紀の古典と言われつつ、日本においては必ずしも多くの読者を得られなかったこの小説が、学界の枠を超えて読書界にも広く受け入れられることになるだろう。

研究成果の概要(英文)：The initial goal was to introduce the perspective of 'distant love' derived from troubadours into the study of Musil's "The Man Without Qualities", which has conventionally been discussed in terms of the existence of incest, and to clarify the spirituality of brother-sister love in "The Man Without Qualities", but in the course of the research it was discovered that brother-sister love is not pure 'spiritual love' but a higher spirituality that does not exclude sexual love either. This revealed that brother-sister love is a search for 'right love' connected to Ulrich's search for 'right life' in the first volume, and from there, it provided clues to why the issue of love is constantly associated with mysticism and considered as a moral issue in the novel.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ムージル 兄妹愛 遙かな愛 トルバドゥール ヴァイニングァー

1. 研究開始当初の背景

ムージルの『特性のない男』(1930/32)は20世紀のドイツ文学史に屹立する長編小説であるが、にもかかわらずその全容の解明は遅々として進んでいない。1942年の作者の死によって小説が唐突に中断され、未完に終わったことがその最大の原因である。1952年から57年にかけてA・フリゼーが三巻本全集(Gesammelte Werke in Einzelausgaben)を編むまで、ムージルは長らく忘れられた作家であった。

フリゼーによって再発見された『特性のない男』は、だがすぐに激しい論争の渦に巻き込まれる。フリゼーは作者が生前に刊行した第二巻第38章のあとに、遺稿から取った90章をつけ加えて小説に形式的な完成を与えたのだが、その遺稿部の配列が恣意的であるとして厳しい批判を受けたのである。このいわゆる「原典批判論争」の結果、フリゼーもその批判を受け入れて新たな二巻本全集(Gesammelte Werke)を1978年に編む。その後文献学的研究はさらに進展し、2009年にはムージルのほぼすべての草稿および遺稿をデータ化してDVDに収めたクラゲンフルト版全集(Klagenfurter Ausgabe)がW・ファンタラによって出された。

ムージル研究の状況はこのクラゲンフルト版全集の出現によって劇的に変化したが、この変化に見合う成果が上がっているとは言いがたい。デジタル版全集であるクラゲンフルト版を読むには、技術的習熟のみならずムージルの遺稿についてのかなり高度な文献学的知識が求められる。そのためであろう、確たる成果としては今のところ編者の一人であるファンタ自身の著書 Krieg, Wahn, Sex, Liebe, Das Finale des Romans „Der Mann ohne Eigenschaften“ von Robert Musil (2015) と J. Bückler: Das Meer und der andere Zustand (2016) くらいしか見当たらない。日本においてはクラゲンフルト版に依拠した論文すら、後述する拙論を除き、まだ存在していない。

本研究は、クラゲンフルト版を活用して『特性のない男』の遺稿部をつぶさに検討し、ムージルが最後に求めた「愛」のユートピアとは何かという問いを究明する試みである。

2. 研究の目的

1952年のフリゼー編『特性のない男』をめぐる原典批判論争も、表面上はフリゼーの判断で構成された第二巻の不適切な編集をめぐる行われていたものの、その隠された中心には、はたしてウルリッヒとアガーテは近親相姦を犯すのかという問いが存在していた。フリゼー編『特性のない男』では、兄妹は「楽園への旅」と題する章で近親相姦を犯すことになっていたが、それは1920年代の草稿であり、最終的にムージルが作品中に取り込んだかどうかはわからない。その一方でフリゼーを批判した研究者は、ムージルが死の直前まで手を入れていた「ある夏の日の息吹」にいたる遺稿部の諸章に近親相姦につながる要素が見いだせないため、最終的にムージルは兄妹の近親相姦を作品中に組み込むことを断念したと考える。だが、作者の死によって中断された小説の最終構想は、今も不明なままである。

本研究の目的は、遙かな愛 という、近親相姦の対極にある精神的な愛に着目し、ムージルの愛の観念を遙かな愛の精神史的系譜に位置づけることによって、これまでだれも気づかなかったムージル固有の愛のかたちを析出することにある。そのために遺稿部における愛をめぐる対話内容の変化をクラゲンフルト版に依拠した文献学的手法によって明らかにし、その成果の上に遙かな愛の精神史的系譜をたどるという方法を取る。遙かな愛とは、12世紀のトルバドールが唱った精神的愛のことである。彼らは世俗的愛の肉体的接触を拒み、それどころか愛する女性から遠ざかることによって性愛を越える精神的な愛を求めようとした。「愛は12世紀の発明である」(シャルル・セニョボス)と言われるように、彼らが求めたのは、古代世界や従来のごとくキリスト教世界には存在しなかった、まったく新しい愛のかたちだった。それが20世紀のムージルに甦る。『特性のない男』の主人公ウルリッヒは、その若き日の恋において恋人である少佐夫人のもとを去り、逃避行の果てにたどり着いた島で愛の神秘体験をするが、少佐夫人の物語といわれるこの非肉体的な恋愛をムージルは「遙かな愛」と呼ぶのである。アガーテと出会った第二巻のウルリッヒが行うのは、この若き日の「遙かな愛」の検証である。

3. 研究の方法

本研究は、近親相姦の有無をめぐる論争で隘路に陥った『特性のない男』研究に、それとは異なる精神的愛の視点を導入することで、解決の糸口を見出そうとする。遙かな愛という、性愛とは異なる精神的愛の系譜に兄妹愛を位置づけることができれば、ウルリッヒとアガーテは近親相姦を犯すのかどうかという従来論争に別の次元で答を出すことができるだろう。もしも兄妹が遺稿部において遙かな愛の方向に向かって歩みを進めていることがわかれば、その果てに近親相姦が犯されるはずがない。この仮説に基づいて、本研究は以下のように構想される。

第一に、遺稿部の第二巻第39章から第52章までを文献学的手法で成立順に考察し、そこに兄

妹愛における「脱性愛」と呼びうる現象が見いだせるかどうかを検討する。この遺稿部は 1978 年のフリゼー版では、「1937/38 に印刷に付され、その校正刷りにムージルが修正をくわえた 20 章」から「校正刷りの章の続きとして 1938 年とそれ以降に書かれた 5 章」と「1939-41 年に書かれた 5 章」を経て、「1942 年の死の直前 2 年間に清書され、さらに修正された 6 章」にいたる遺稿であるが、それをより精緻に整理し直したクラゲンフルト版によって綿密に検討する。とりわけ晩年のムージルが何度も手を加えた「ある夏の日の息吹」をはじめとする諸章については、それぞれの稿の差異を要素分析の手法で詳細に比較考察する。

第二に、そうして見いだされた『特性のない男』の 遙かな愛 をヨーロッパにおける 遙かな愛 の精神的系譜に位置づけることによって、ムージルの愛の観念の独自性を析出する。遙かな愛 の精神的系譜として私が想定しているのは、以下の二つラインである。

(1) トルバドゥール/ニーチェ/リルケ/ムージル

(2) プラトン/ヘルダリン/トルストイ/ヴァイニンガー/ムージル

第一のラインは、狭義の 遙かな愛 の系譜である。12 世紀のトルバドゥールが生み出した 遙かな愛 の観念は 19 世紀のニーチェに甦る。ニーチェの『悦ばしき智恵』(1882)に付された副題 *la gaya scienza* がトルバドゥールの作詞法を意味することはよく知られているが、『善悪の彼岸』(1886)においてもニーチェはトルバドゥールの愛の観念を「受難としての愛」と呼んで讃えている。また、一般には強者の差別感情を表す概念と見なされている「距離のパス」には、他者との間に距離を求める意識が内包されており、それがキリスト教の隣人愛を否定する「遠人愛」(*Liebe zum Fernsten*)の発想を生むと同時に、生における「孤独」の重視という考えにもつながっていく。20 世紀初頭のパリにおける「孤独」を描いたリルケの『マルテの手記』(1910)では、愛する貴婦人に「自分の想いが聞き容れられることを何よりも恐れた」というトルバドゥールの存在が想起されるが、これは「所有なき愛」というリルケ独自の愛の観念を語る文脈に置いてであり、そこでは 遙かな愛 は「所有なき愛」の祖型と見なされている。ムージルは、先述のように『特性のない男』でウルリッヒ若き日の恋を 遙かな愛 と名づけることによってこの系譜に連なるのである。

第二のラインは、広義の 遙かな愛 の系譜である。ここでは 遙かな愛 を精神的愛というゆるやかな枠で捉え、「プラトンの愛」を起点とするヨーロッパにおける精神的愛の系譜をたどる。むろんプラトンが『饗宴』で語る理想の愛は少年愛を前提としており、いわゆるプラトニック・ラブとは異なるものであるが、それが 15 世紀のフィチーノを経て 18 世紀のヘルダリンに到り、性愛を排除した純然たる精神的愛の讃歌が小説『ヒュペリオン』(1797-99)において奏でられる。しかも、『饗宴』でソクラテスに愛のなんたるかを語る女哲学者と同じ名前を持つディオティーマによって、プラトンの愛のこうした精神性への純化は、トルストイの『クロイツェル・ソナタ』(1891)において性愛の弾劾となり、ヴァイニンガーの『性と性格』(1903)においてはいっそう苛烈な性愛批判の形を取った、プラトンの愛の熱烈な希求となる。ムージルもまた、登場人物の一人をディオティーマと名づけることによってこの系譜に連なるのだが、だがそれは精神的理念を追求していたサロンの女主人が性科学を研究した挙げ句、性愛に溺れていくというイロニーを介してであった。

この二つのラインが交差する地点に立つムージルは、 遙かな愛 ないし精神的愛の系譜を継承しつつ、その先にいまだ存在しない愛のユートピアを見ようとした。少佐夫人の物語 という、一度は破綻した 遙かな愛 を兄妹愛によって救済しようとするウルリッヒとアゲーテは、その未定のユートピアを「熾天使の愛」「性のない愛」と呼ぶ。それが遺稿中「官能を越えたやさしさ」としての「エロス」と言い換えられるとき、そこには性愛とは異なるものの、しかし単に精神的と言って済ますこともできないムージル固有の愛のかたちが予感されていたと考えていいだろう。その愛のかたちを析出することが、本研究の最終的な目的である。

4. 研究成果

本研究の基礎固めとして、遺稿部の第二巻第 39 章から第 52 章までを文献学的手法で成立順に考察するという計画は、早い段階で崩れた。当初、草稿を含むムージルのほぼすべてのテキストをデータ化したクラゲンフルト版全集に依拠してこの作業を進める予定だったが、予想に反してクラゲンフルト版が信頼できる版ではないことが判明したからである。草稿の単語レベルの読み間違いをはじめとして、トランスクリプションに転記する際のミス、校正刷りへの欄外の書き込みに対応する際に見られる扱いの不統一等、ムージル研究の権威たちの仕事とは思えないような杜撰さであった。それゆえこの基礎固め作業は、随時ムージルの草稿に直接当たって確認する必要に迫られ その草稿を写真として掲載してくれているのはクラゲンフルト版の功績であり、その恩恵に浴することができたのは幸いであった それに多大な時間を要した。

だがそれは、『特性のない男』を正確に読むという意味では好機でもあった。遺稿部については、1978 年のフリゼー版にも、2016 - 18 年のファンタ版 (*Gesamtausgabe*) にも とりわけファンタ版にはクラゲンフルト版以上に 無視できない不備があり、双方のテキストを比較してはムージル自身の草稿に還って本来あり得たテキストに接近する作業は、文学研究の大前提となる精密なテキストの作成につながった。むろん完璧ではない。今回読めたのは『特性のない男』を愛のテーマに即して読むという基本方針の下に抽出した章だけであり、それもすべての

草稿に直接当たったわけでもない。それは未来の文献学者の手に委ねるとして、それでも今回、現存するどの『特性のない男』よりも正確なテキストを作成し、その翻訳（抄訳）を完成できたのは、大きな成果であった。

これも予想外の発見であったが、翻訳とはテキストの論理と情理に付き従う営みであった。これまでひととおり了解していたと思っていたテキストが、翻訳を始めた途端、ゴツゴツとした岩のように立ちはだかってくる。あるいは手で掬ってもこぼれ落ちる水のように逃げていく。それを打ち砕き、捕まえるには表層の論理　そもそもそれ自体ムージルにあっては把握困難であるが　の奥深くに潜りこみ、隠された情理を見いださねばならない。そうやって翻訳を通して舐めるように読んでいくうちに、当初仮説として掲げた兄妹愛のかたちが維持できなくなってきた。

当初の計画では、第一巻の　少佐夫人の物語　から第二巻の兄妹愛まで、『特性のない男』における愛のかたちを一貫して　遙かな愛　の視点から読み解くはずであった。だが、遙かな愛の精神性は　少佐夫人の物語　を解釈するには有効であったものの、遺稿部を含む第二巻の諸章から読みとられる濃密な官能性は、兄妹愛を「精神的な愛」の範疇に留め置くことを許さなかった。とりわけ校正刷り稿第45章に見られる官能シーンでは、兄妹は肉体的接触のうちに象徴レベルでの性交に接近し、肉体的合一に向かうことに互いに合意するものの、にもかかわらず「いまだ影のようではあるがより完全な合一の世界」から下された「高次の命令」に従うこととなる。この高次の命令こそが、ムージル文学の核概念をなす　別の状態　を小説中に具象化した「千年王国」から下される命令であり、兄妹は官能に導かれて肉体的合一を求めつつ、脱俗的な神秘的世界に生きることを選ぶのである。

以後、兄妹は「中断された性交」にも似た状態に置かれる。肉体的合一に惹かれながら、より高い精神的合一のためにただちに性交を求めることを断念する兄妹の愛は、たんなる精神的な愛というよりも、性愛をも排除しない高次の精神性に支えられていると言えるだろう。この高次の精神性のゆえに、『特性のない男』は世界文学に類をみない「精神的かつ肉体的な」愛のかたちを追求する小説に発展していくのである。『特性のない男』を愛のテーマに即して読む試みは、従来指摘されてきた第一巻と第二巻とのあいだに横たわる断絶の問題にも新たな解釈を提示してくれた。第一巻のウルリッヒは「正しい生」を求めて様々なユートピア探究に乗り出すが、目的を果たせぬまま第二巻でアガーテと出会い、愛のユートピアへと向かう。つまり、第二巻においてウルリッヒは「正しい生」の特殊形態としての「正しい愛」の探究にアガーテとともに乗り出すのであり、そこに断絶と呼べるものはない。愛の問題がたえず神秘主義の言説との関連で語られ、モラルの問題として考察されるのは、そのためである。

以上のことから、『特性のない男』を近親相姦の物語として読む、ルージュモンをはじめとするこれまでの試みは斥けられる。兄妹愛に「精神的な愛」を読もうとした当初の目論見は修正を余儀なくされたものの、性愛の可能性を孕む高次の精神性を兄妹愛のうちに見出した本研究は、近親相姦の有無を軸に論じられてきた従来の読み方に再考を促すものとなるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大川勇	4. 巻 162号
2. 論文標題 ヴァイニングの『性と性格』は女性嫌悪の書か 須藤温子『エリ阿斯・カネッティ 生涯と著作』 を読んで	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本独文学会『ドイツ文学』	6. 最初と最後の頁 246-250
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 白坂彩乃、大川勇	4. 巻 66号
2. 論文標題 オット・ヴァイニング『性と性格』 翻訳と解題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京大大学人間・環境学研究科ドイツ語部会『ドイツ文学研究』	6. 最初と最後の頁 1 - 86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------